隣り同士の国—カナダとアメリカ

カナダは米国なしには考えられない。一つの大陸に同じヨーロッパ文化を受けついでできた両国は、ほとんど運命共同体のような存在だ。歴史的背景、人口、経済力などの違いから、一方は兄、他方は弟のような関係になった。そしてそのことは、両国の間にきわめて親密な友情を醸成したが、一方では心理的な軋轢や政治・経済的問題も生みだすことになった。以下、両国関係についてのコメントを集めてみた。（🍁はカナダ人、★はアメリカ人を表わす）

🍁「アメリカ人はわれわれの最大の親友だ——好むと好まざるとにかかわらず。」（ロバート・トンプソン社会信用党党首、一九六七年）

🍁「自然はカナダとアメリカ合衆国を隣り合わせにした。今やこの二国は友邦となるか敵になるしかない。両国は、お互いに無関心でいるにはあまりに近すぎ、あまりに多くの利害を分かち、あまりに多くの同種の抱負をもっているからである。」（ジョセフ・アドルフ・シャプロ、一八九一年）

🍁「米国が存在すること だけで与えているカナダに対する絶え間ない圧力を、米国民は決して過小評価すべきでない。われわれはあなたがたと違う国民である。われわれがあなたがたと違うのは、あなたがたのおかげでもある。あなたがたのお隣りに住むのは、象と同衾することにいくらか似ている。象がいくら親しくて、穏やかでも、ぴくぴく動いたり、鼻を鳴らしたりするたびに、こちらまでひびいてしまう。」（トルドー首相、ワシントンのナショナル・プレス・クラブで、一九六九年）

🍁ノースロップ・フライ（ケベック州出身で、有数の文芸評論家・思想家。前ハーバード大学客員教授で、現在はトロント大学教授）

🍁「米国はわれわれの隣国で盟邦であるばかりか、友邦でさえある。」（トルドー首相がモスクワでブレジネフ・ソ連首相へ、一九七一年）

「（在米カナダ人は）折りにふれ、自分が外国にいるんだということを自覚する。私がこの問題に出くわしたとき考えたのは、私のその時の宗派がカナダ合同教会であり、その時の政治的党派がCCF（労農派、現在の新民主党）だということだった。この二つは、どうしてもアメリカの状況にあてはめることができなかった。カナダ人の頭の中では、国境は現実性をもっているのに、アメリカ人にはその観念が全くない。カナダではアメリカを指すのに〝国境の向こう側〟というのに、アメリカ人がそういうのはついぞ聞いたことがない。

アメリカ人による誤解の最大の根源は、両国が結局は同じで、カナダ人が別個の国民になるほど歴史的・文化的発展に大きな違いがあったわけではない、と臆断していることにあるようだ。

両国には侵略性にリズムの相違がある。アメリカ史には侵略的暴力がふんだんにあったのに対し、カナダ史における暴力はフランス領カナダに対する軍事制圧や西部警察（によるインディアン制圧）など、上からなされたものであった。カナダでは不満分子の除去という形をとるということは全くなく、インディアン戦争のようなできごとも回避できた。

米国は十八世紀、すなわち〝理性の時代〟に自己を明確化するようになり、それ以来十八世紀に執着してきた。憲法も〝これらの事実を自明のものとする〟という書出しで始まっている。ところが、カナダでは、これまで自明のことは何もなかったし、十八世紀も全く経験していない。十八世紀の英国とフランスは、それぞれのとりでを叩きつぶすことに明けくれたのだ。カナダは装飾的、侵略的十七世紀に形をなし、浪慢的、侵略的十九世紀に生まれ変わった」

「私は、これまで、カナダは世界に残されている唯一の本当の植民地だ、とたびたび言ってきた。カナダは、今やアメリカの植民地なのだ」

「カナダをアイロニーの国だとする捉え方——例えば、マーガレット・アトウッドの敗者を英雄視する考え方——は、カナダ文学のひとつの特質を表わすもので、一考に値すると私は思う。マッケンジー・キングは敗者ではあったが、この国をまとめていくにはずっと必要な妥協の権化でもあった。もしカナダが妥協できなかったなら、カナダは存在し得なかったはずである」

「カナダのほとんどの産業はアメリカの産業の子会社で、したがって労働者の大部分は実際にはアメリカの従業員ではないか、と私は思う。カナダにある精油所で働くのと、ルイジアナ州バトン・ルージュにある精油所で働くのとでは、それほど大きな違いがあるとは思われない。しかし、昇進するにつれて、本当の命令はどこかよそからくるのだということに気づき、やり切れなくなるときがくる」

🍁「カナダと米国の国境は、典型的な人的創造物だ。物質的には目に見えないし、地理的には非論理的、軍事的には防衛不可能、そして感情的には不可避的だ。」（ヒュー・L・キーンリーサイド、一九二九年）

🍁「カナダはシャム双生児のように、物理的に米国と結びついている。双生児の一人が負傷すれば、他方も苦しむ。シャム双生児を切り離して、生存を期待することが不可能であるのと同じように、カナダの防衛を米国のそれから切り離すことはできない。」（チャールズ・フォルクス参謀会議議長、一九六一年）

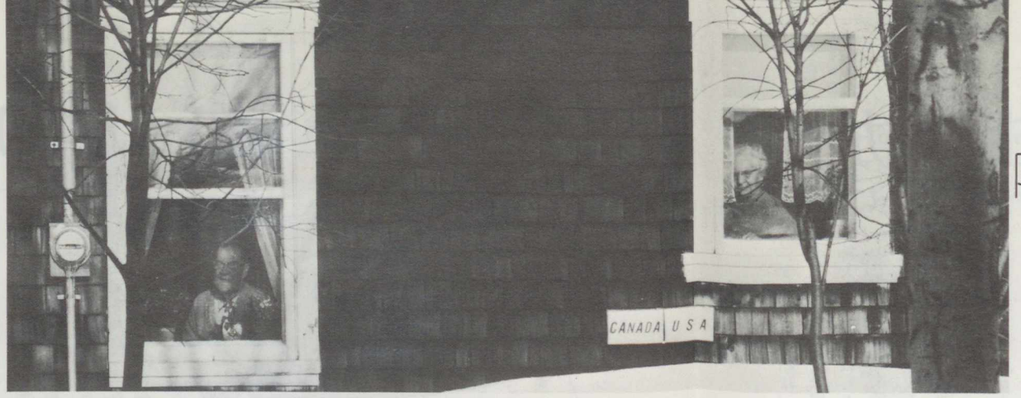
🍁アルバート・レゴール（ラバル大学国際関係ケベック・センターの所長）

「アメリカ合衆国は、オンタリオ州に対するほど、ケベック州に関心を払っていないと思う。しかし、ケベックの人たちは、アメリカを偉大な国、将来の国——何かお手本のように（特に経済や産業の分野で）みているようだ。」

★「もちろん、われわれにはそれぞれ独得の国家的性格と歴史がある。あなたがたは発展的に独立を獲得したが、米国は革命によってそれを得た。」（アイゼンハワー米大統領、一九五八年）

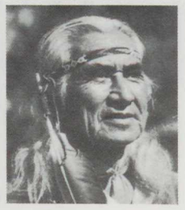
🍁「あなたがたの河川はわれわれの領内を通り、われわれの河川はあなたがたの領内を通る。」（ウィルフリッド・ローリエ首相、一八九一年）

🍁「カナダは、
イギリスの政府
フランスの文化
それに米国の科学技術
をもてたかも知れなかったのだが、
結果的には、
イギリスの科学技術
フランスの政府
米国の文化
をもつことになった。」
（ジョン・ロバート・コロンボ、一九六五年）



「われわれはフランス語や英語で夢を見るが、働いたり、楽しんだりするのはだんだんアメリカ語に依るようになった。」（ジュール・レジェ＝現総督、一九五七年）

🍁「両国はとても近く、ロック・アイランドではカナダで髪を切ってもらったあと、場所を移動しないまま、アメリカで靴をみがいてもらえるほどだ。」（アンドレ・パトリ、一九六四年）



🍁酋長ダン・ジョージ（コ・サリッシュ族の酋長で、七七歳。映画「小さな巨人」に酋長オールド・ロッジスキン役として出演、アカデミー賞受賞候補に指名されたほか、ニューヨーク映画批評家賞を受賞した。北部バンクーバーで生まれ、木こり、荷役夫となったが、けがで引退、その後映画界に入った。）

「私は、これまでの人生の過程で、二つの異なった文化を経験した。私が生まれた文化は大家族制であった。私の祖父の家は長さが八十フィート（約二十四メートル）もあった。それはスモーク・ハウス（注・本来は薫製室のこと）と呼ばれ、入江のビーチわきに建っていた。祖父の息子たち全部と彼らの家族が、その大きな家に住んでいた。寝所は太閤（い）のむしろでわけられ、中央におかれた炉でみんなが料理した。こうした家の中では、部族全体が一緒に住み、助け合い、お互いの権利を尊重するようになる。

私の文化があなたがたの文化に教えるものは、残念ながらあまりない。ただ、私の文化は友情と親交を大事にした。プライバシーをそれほど固執すべきものとも思わなかった——プライバシーは壁を作るし、壁は不信を育てるから。」

🍁「両国民は北アメリカ人だ。われわれは、われわれの地理の申し子であり、同じ希望、信念、夢の産物である。」（ジョン・ディフェンベーカー首相、一九五八年）

🍁「アメリカ人は、場合によっては、自分をそう呼ぶのを注意すべきだ。全大陸の名前を私していると思われかねないからだ。カナダ人もアメリカ人と同じく北アメリカ人である。しかし、アメリカ人が自分をアメリカ人と呼ばないならば、カナダ人がそう呼ぶだろう。誰も彼を合衆国人とは呼ばないだろう。」（エバレット・C・ヒューズ）

★「カナダというのを聞いて、それはどこかの山の中にあるのだろう、と思った。」（マリリン・モンロー、一九五二年）

🍁ミルトン・ウォン（バンクーバー市にあるナショナル・トラスト・カンパニーの投資部部長。三十七歳。両親は中国人）

「アメリカ合衆国との繋がりから逃れることはできない。カナダ人がどう感じたがっていようと、それは非現実的だ。農業を基盤とするアメリカ合衆国は世界最強だ。それは否定できない。世界中の経済界がアメリカで起こることに影響される。しかし、支配ということばは使いたくない。輸出に大きく依存している国として、現実は認めなければいけない、と私は思う。もし、全く新しいカナダ主義をはじめるとしたら、われわれはどのていど生活水準を落としてもいいと思うだろうか。」

★「われわれは過去からの共通の価値を、現在の共同防衛を、また将来への共通の願いを、そしてもちろん、全人類の将来を分かち合っている。

地理はわれわれを隣人にした。歴史はわれわれを友人とした。経済はわれわれをパートナーとした。そして、必要はわれわれを同盟者とした。自然がこうして結びつけた者たちを、何人にも切り離させてはならない。」（ジョン・F・ケネディ米大統領、一九六一年）

🍁「たったひとつの砦や大砲にも守られない、この三千九百八十六・八マイルのカナダ・米国国境は、世界で最も友好的で、最も目に見えない国際境界線だ。毎日、何千という旅行者がここを渡るが、通行中、その存在に気付くこともほとんどない。国境は心地よい賛辞を浴びるナイヤガラに洗われ、とどまることのない外交的対話で浮きぼりにされ、あるいはときによっては、あいまいにされてしまう。国境は、どちらの側でも、何人たりとも変更することを考えない、ほとんど神の行為に近い絶対的事実として受け取られている。」（ブルース・ハチソン、一九六六年）